

# 外国にルーツを持つ 子どもへ居場所支援

東京都豊島区「WAKUWAKU×ルーツ」

公益財団法人あしたの日本を創る協会 國井紀彰



東京都豊島区池袋で、オンラインで外国にルーツを持つ子どもたちの居場所づくりをしている、WAKUWAKU×ルーツ（ワクワク・クロス・ルーツ。以下、「クロス・ルーツ」）。現在、多文化共生の名のもと、様々な地域で外国にルーツを持つ子どもへの支援活動が行われている中、この活動は地域の大学院生などによって始まった。今回、オンラインの活動を取材するとともに、この活動を立ち上げた立教大学大学院社会学研究科博士前期課程2年で日本の移民をめぐる状況について研究している益子亜明さんに話を伺った。

益子さんは、立教大学の学部学生だった2016年から、様々な国にルーツを持つ人々が住む、池袋地域の子どもたちに学習支援をする、認定NPO法人豊島子どもWAKUWAKUネットワーク（以下、「WAKUWAKU」）の活動に参加している。その活動の中で、学習だけでは外国ルーツの子どもたち特有の社会的不利・困難に対応できない事実に向面。2020年、この課題に取り組むべく、公益社団法人シヤンテイ国際ボランティア会と「WAKUWAKU」との協働事業として、「クロス・ルーツ」の活動が始まり、学習支援事業に参加していた他の学生ボランティアと共に運営を任さ



れている。  
コロナ禍の中で始まった「クロス・ルーツ」の活動は、主にオンラインで行い、活動の全体をコーディネートする大学院生4人と通訳として中国からの留学生とネパールの大学生2人の6人が、メインのスタッ

フである。参加している子どもたちは、主に豊島区の小学校高学年から高校生。中国、ネパール、トルコ、フィリピンルーツなどの10人程度が参加。その多くが外国で生まれ育ち、学齢期に日本への移住を経験した



子どもたちだ。

この活動の目的は五つある。それは「様々なバックグラウンドを持つ子どもが、他者との多様なつながりを構築」「各々のルーツやバックグラウンド、自分の存在を肯定的に捉える」「活動に参加するすべての人が共に社会や他者について考える」「自分と社会とのつながりを考え、主体的に声を挙げる」「参加者にとって『何もしなくてもよい』場所を構築」「マジョリティへの意識変革を促す」というもの。これらの目的は、外国ルーツの子ども・若者について研究している4人の大学院生で議論して決められ、子どもたちに寄り添い、子どもたち自身が自分の存在を肯定的に捉え、主体的に未来を構築していく過程を共にしたいという想いがある。

毎週土曜日17時30分から始まるこの活動では、自己紹介とこの場でのルールの確認、参加者同士が打ち解けるための簡単なゲームなどを行った後、毎回スタッフがスライドを用いて、その日のワークを始めていく。ワークでは、子どもたちにとって身近な話から社会的な問題まで、様々なテーマについてグループに分かれて話し合う。このようなことを通じて、多様なルーツを持つ子どもたちが、それぞれ自分の意見や考えを伝え合う機会を作っている。

とはいえもちろん、子どもたちはすぐに自分の意見を言うようにはならない。そのため、この場での六つのルール、「ほかの人の話を聞こう」・「ゆっくり自分のはやさで」・「話したくないときは話さないで」・「疲れたときは休もう」・「ほかの人を大切にしよう」・「話したい言葉で話そう」というものがある。このようなきめ細やかに場が作られていることもあり、日本語だけでなく母語で積極的に話をする子どもが増えてきているという。

「この活動の一つの目的には、子どもたちが日本以外の国にルーツを持っていることを否定しないようエンパワメントすることだ」と、自身も外国にルーツを持つ益子さんは話す。そして、そのためにも、この場では子どもたちがゆっくりと考え、話すことができるようにしているとのこと。学校の中や日頃の生活の中で子どもたちは目の前の成果や時間に追われてしまい、自分のことに向き合う時間を十分に取ることは難しい。そんな子どもたちにとって、この場が「自分がそのようなルーツを持っているということを他者や自分が属する場所で耳を傾けてくれる、承認してもらいうことができる、オルタナティブな場所になれば」と益子さんは語ってくれた。